

## 仏法紹隆寺(諏訪)保管の「庚申堂」「大黒天

## 厨子二つ 高島城遺構

廃城から150年  
節目の「新発見」

高島城三の丸に設置されていた庚申堂。鮮やかな彩色が確認できる



高島城東御殿に安置されていた大黒天厨子

かつての殿様の暮らしや祈りの形態が垣間見える貴重な史料——。諏訪市四賀の仏法紹隆寺に保管されていた二つの厨子が、高島城（同市高島）の遺構であることが分かった。同寺の岩崎宥全住職（47）が寺に残る文献や財産目録に当たる什物帳を読み解いて判明。29日、報道陣に公開した。岩崎住職は「驚きの新発見。今年は高島城の廃城から150年の節目で、何か因縁めいたものを感じる」と感慨深げに話す。（杉本哲也）

二つの厨子は高島城三の丸に設置されていた仏堂「庚申堂」と、東御殿に安置されていた「大黒天厨子」。彩色の庚申堂は1598（慶長3）年の築城時から存在していた可能性があるという。大黒天厨子は、江戸後期に活躍した立川流建築の二代目立川和四郎富昌の作と推測される。

今夏に諏訪市博物館で行われた高島藩主諏訪家に関連する展示会に合わせ、岩崎住職が同寺の幕末の住職宥中が残した記録を読み返したところ、「高島城の東照宮を紹隆寺に移す」旨の記述を発見。詳しく調べる

と、二つの厨子が移された史実が記されていた。東照宮の所在は分からなかったが、このうち二つは判明。同寺普賢堂の裏堂（倉庫）に保管されていた。宥中の記録によると、庚申堂は1872（明治5）年に政府から東京移住を命じられた諏訪家により紹隆寺へ遷座。岩崎住職は「当院が高島藩の祈願寺だったことや、藩の危機には非常金を納めていた縁ではないか」と推測する。大黒天厨子も同年、高島城から移転された。

庚申堂の側面には中国唐時代の伝説上の僧侶である寒山拾得図などが描かれ、扉の内側は月と太陽、菊紋の意匠。大黒天厨子には打ち出の小づちなどが彫り込まれている。庚申堂に祭られていたとみられる青面金剛は所在不明。大黒天も姿はなく、現在は清瀧権現が祭られている。

## 1日から一般公開

「新発見の宝は、皆さまに知ってもらいたい。ことが次代につなぐ最善の方法。多くの方にご覧いただきたい」と岩崎住職。11月1日から年内いっぱい一般公開する。檀

A!」では、「諏訪高島城の遺物—時代に流され仏法紹隆寺に移した三つの厨子」をテーマに意見を交わす。

館で開く「すわ大昔サロンW